
妄想少年の思春期恋愛―栗山雅紀篇―

春馬令

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想少年の思春期恋愛―栗山雅紀篇―

【Nコード】

N1928N

【作者名】

春馬令

【あらすじ】

中学3年生の妄想爆発の恋愛小説です。超ウザイですが、昔、もしくは未来にそうゆう恋愛をした（する）かもしれないので、勘弁してください。

恋愛っていいものですよ♪

『憧れのキミ』

地面いっぱい広がる緑。それを外に出さないようにするかのように広がる青々しい空。その中で君は、笑っていた……。

某県の中心部にそびえ立つ中学校、『近江中学校』。季節は秋。2学期も始まったところだ。

「暑い……死ぬ」

3年5組の廊下側の前から3番目、それが今回の主人公である栗山雅紀（くりやままさき）の席だ。雅紀は残暑厳しい教室の中で一人うな垂れていた。だが、それは雅紀に限ったことではなく、全員が授業と授業の間の10分を休憩時間に行っている。

「栗山、次は移動教室だよ」

雅紀は閉じていた目をあけた。目先には、雅紀の『憧れのキミ』。

「ああ……。分かった」

顔が赤らめいているのを隠すかのように理科の教科書とノートを探す。

「今日は遅れちダメだよ」

「分かってるよ、いつもうつせえんだよ」

つい、強く当たってしまう。その度に、後悔をする。だが、正直に言おうと思えば上手くない。

理科室。今日は実験の日だ。よく分からないうちに号令が始まって、ノートをとり始める。

「今日の実験の後にノート提出ね」

中年の先生が黒板にチョークで文字を書きながら独り言のように呟いた。

「ゲッ……マジかよ……」

雅紀は今まで開いていなかったノートを開いてシャーペンを持つ。

「早く書かないと。先生に目つけられてるんだから」

真正面に座っている『憧れのキミ』からの声。本当だったらその台

詞をチャンスに話を進めたいが、今はそんなことはムリだ。ノートをとらなければいけないのと・・・、告白を失敗した相手に向ける顔がない、ということ。

2日前。国語の授業中。隣の席になったのをいいことに、さりげなく聞いてみた。

「お前って、好きな人いるの？」

「・・・いる」

「ふうん・・・」

自分から話しをはじめたのに、素っ気無く答える。もちろん、興味があると思われたら終わり。

「栗山は？」

まさか・・・と雅紀は耳を疑った。『憧れのキミ』が、自分の好きな人に興味をもつとは思わなかったからだ。

（どーする？素直に答えるか？）

雅紀は、本気で悩んだ。

変わった名前

「俺は、・・・いるよ」

雅紀は静かに答えた。たとえその質問が、『憧れのキミ』の社交辞令だったとしても、雅紀は自分の気持ちを少しでも気づいて欲しかった。

「やっぱりいるんだあ。ねえ、誰？」

ドキンッ！雅紀は自分の心臓が口から出ないか心配だった。

「・・・な、なんでお前えに教えなきゃいけないーんだよ」

「ええー、だって気になるじゃん♪」

（おいおい・・・、この展開だったらいけんじゃねーのか？）

雅紀は、告白をする前から、妄想を爆発させていた。雅紀の妄想頭脳では、デートのシーンまでが観えていた。

「ねえ、誰？」

「・・・お前が教えてくれたら言うよ」

この台詞は、雅紀がだした唯一の賭けだった。もし、『憧れのキミ』の好きな人が自分じゃなかったら、違う人物をてきとうに答えるか、ごまかそうと思った。

「私？私はある・・・」

「ストップ！やっぱいいや、俺から言う」

その言葉を発したとき、雅紀には緊張がなかった。もう、覚悟はできていると、自分で決めていた。

「俺の、・・・好きな人は・・・・・・お前だよ」

「・・・ハハッ、何冗談言ってるの？」

「なあゝに間あ空けてんだよ、嘘告に決まってるだろうっ」

「最悪・・・」

『憧れのキミ』は、そういつて、授業に戻った。大きな後悔が、雅紀の心を渦巻いた。

「あのさっ、もし、本気だったらどう？」

「は？」

「だからさっ、」

「ムリ！」

はつきりと、『憧れのキミ』は言った。

「だって、好きな人いるんだもん。ごめんね」

『憧れのキミ』は笑いながら言った。それにつられて、雅紀も笑った。自分の心に、嘘をついた。

「ごめんって、何言ってるんだよ。俺だって、お前のこと好きじゃねーっての」

そう自分の心に嘘をつき続けた瞬間、雅紀の好きな人は、『憧れのキミ』から、ただの、『松本織^{まつもといおり}』になった。

「・・・・・・・・」

理科の授業も後半に入り、実験の準備が始まった。

「スポイト1つにビーカーを2つ。硫黄も持っていてね」

先生の言葉が途切れたと同時に、4人1班のうちの2人が立ち上がる。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

雅紀と織の中に会話はない。

（やっぱ、コイツの中で、俺はただのクラスメートなんだろうな）

あの時の後悔が、ただ、闇となっていた。とてつもなく大きい闇。いずれ、開花してしまうかもしれない、純粹な、後悔・・・・。

中途半端なメール

その日、雅紀は授業中はもちろんのこと、休憩時間も、織と話さなかった。雅紀から話し掛けなかったのは当たり前だが、織も話を持ってきたりはしなかった。

「・・・織」

雅紀は帰宅後、自分の部屋のベットに寝そべっていた。取り出したのはケータイ。メールを打てば、何かが変わると思った。

『おっす♪こないだは上手く誤魔化されたからよお、今日はお前の好きな人、聞かせてもらうぜ』

打ち終わった後、『送信』が押せなかった。たった一回力を入れるだけなのに、メールを送れない。

「ったく、俺は何考えてんだよ」

そう言葉に流されるまま、ボタンを押した。『メール送信中・・・』の文字が画面に出る。今なら中止できる。なのに、雅紀はしなかった。そう、雅紀の妄想はもう始まっていたから・・・。

―まず、このメールを送られた織はどう思うか。雅紀の妄想では、織は雅紀のことを好きはず。しかし、正直になれない。しばらくはメールを送れないでいるだろう。

「よしっ」

覚悟を決めた妄想の中の織がメールを打ち始める。

『私、栗山が好き・・・』

そのメールは織がボタンを押す前に雅紀に届く。雅紀も、すぐにメールを返す。

『実は、俺も』

そのメールを送る。それで、付き合う。初めてのデートはショッピングモール。夜になって織を家に送る。玄関の前でキ―

ブーッ・・・ブーッ・・・。雅紀の妄想は、そこで途切れた。

「♪ムフッ♪」

変な声が漏れる。あきらか、変態だ。

『誰でしょう？』

ピキピキツ……。そのメールを開いたとき、雅紀は『ストーン雅紀』に変わっていた。

「……」

無言のまま、メールを返す。

『なあ、教えてくれよ』

（こうなりや意地でも聞き出してやる！）

『送信』のボタンを力強く押す。返信を待っている時間は、さっきの妄想の繰り返し。メールが帰ってくれば妄想終了。

『教えない』

教えないの後に、可愛い絵文字が入っていた。

「くそっ」

くやしさを紛らわすためんの逆ギレ……。もはや哀れになっていく。

「ギャンブルするしかねえ……」

『俺はお前のことを本気で好きです』

絵文字を使わず、尚且つ敬語にする。これが、一番本気と伝わる文章だろう。メールを待っている時間も、妄想はしなかった。

『ありがとう』

短い文章。すぐにメールを送る。

『で、返事は？』

『好きな人いるから……』

『だから、その好きなやつって誰だよ？』

『教えない』

『俺じゃダメなのか？』

『ダメ』

『どこが？』

『変態なところ。いつもエロ話してんじゃん』

『それは、話を盛り上げるためにだなあ』

『それが嫌なの』

『じゃあ、好きなところある？』

今まで流れるような文章の交換だったが、そこでストップした。好きなところがないから、オブラートに包んで返す言葉を考えているのか。それとも、恥ずかしくて打てないだけなのか……。雅紀には、分からなかった。

結局、その日はメールは帰ってこなかった。

明日は、土曜日。学校は休み。部活も、3年の2学期には終わっている。雅紀は、会えないのだ。でも、メールを中途半端に終わったから、まあいいやと思う雅紀の心境は、複雑だった。

（明日、もっかいメールしてみっか・・・）

告白コンパ！

翌日。朝8時。雅紀はベットから起きていなかった。両親は土曜日でも働きに出ているから、うるさくはされない。いつも、起きるのはお昼近くだ。だが、今日は一通のメールで8時に起きた。

『やつはおー♪今日はヒマかな？あのさあ、コンパあるんだけどくる？3対3で！来るなら早めにメール返信頂戴ね』

クラスの友達で、一番中のいい村上浩介（むらかみこうすけ）からのメールだった。雅紀は織がいるのでどうしようか迷ったが、とにかく行くとメールを返した。

『じゃさ、いつもの店で集合ね。』

『どこでやんの？』

『カラオケ。支度できたらすぐ集合ね』

『ん』

そこでメールは終了した。

（カラオケって、2次会かよ）

雅紀はツツコミを入れながら身支度を軽く終わらせた。カラオケで遊ぶにしては早いと思ったが、自転車をこぎながらだったからか、深く追求しないでした。唯一考えたことといえば、

「やべっ、メンバー聞くの忘れた」

ということだけ。

数分後、雅紀はいつも遊んでいるカードショップに自転車を止めた。朝早いため、まだ営業はしていない。

「おぉーい」

雅紀の来た方向とは反対の道から、浩介の姿があった。

「よっ」

「おっす」

浩介の挨拶に続いて雅紀もあいさつを返した。

「なあ、ほかのメンバーって誰よ？」

「ん？ああ……。俊、そろそろくんじゃね？」

浩介は近くにあった自動販売機でコーラを買いながらいった。俊と
いうのは、雅紀と浩介が所属していた部活のチームメイトだ。因み
にフルネームは斎藤俊（さいとうしゅん）3人でいつもどこかで遊
んでいた。もう、遊ぶこともないと思っていた雅紀にとっては、幸
運に近かった。

「ちーっす」

浩介の来た方角から、俊も到着した。俊はスポーツバックを持って
いた。いつものバックだ。その点、雅紀と浩介は身軽だ。軽めのシ
ョルダーバックを持っている。雅紀のバックには、P〇Pと財布、
ケータイしか入っていなかった。ふくらみからして、浩介も同じよ
うだ。

「さあ〜と、行動開始といきますか」

3人が揃ったのを見計らってか、浩介が言い放った。

「女子の皆さんはもう会場についてるってよ」

「？」

「？」

雅紀と俊には意味が理解できなかった。

「今日って、カラオケっしょ？」

俊が浩介に聞く。

「違う！今日は、映画の後にカラオケ！」

「はあ！？」

雅紀は意味がわからないといった風に言った。

15分後、自転車で隣町の映画館につくと、私服の女子3人組が
いた。

「おい」

浩介が声を大きくして呼ぶ。3人が振り向いた。そこには、俊が思
いを寄せる女子、工藤未来（くどうみく）、浩介が好きな、後藤百
合（ごとうゆり）、そして、松本織がいた。

「！？浩介、何考えてんだよ！メンバー、聞いてねえぞ」

雅紀は緊張のあまり、声が裏返ったが、今はそんなことは気にしていられない。

「そうだよ、意味分かんね」

俊も緊張気味で言った。

「だって、今日は告白コンパだぜ？」

浩介は平然とした顔で言った。だが、雅紀には、これがチャンスだと素直に思った。

村上浩介が好きな言葉『俺がリーダー！』

斎藤俊が好きな言葉『ノリ良いやつは良い奴！』

栗山雅紀の想い『素直になりたい・・・』

3度目の変化。そして、締りのない終わり方・・・。

映画館で出会った6人。

「さあ〜と、何みる？」

いつもの流れで、浩介が仕切る。

「俺、なんでもいい」

「同感」

俊も雅紀もふてくされ気味で並んでいた。

「私も、なんでもいいや」

未来が可愛さ重視のスカートを触りながら言った。

「私も・・・なんでもいい」

百合が未来の後ろに隠れるようにして言った。

「織は？」

未来が織に聞いた。

「私も、なんでもいいよ」

5人ともなんでもいいといわれた浩介。リーダーの血が沸騰したのか、すごい提案をしてきた。

「じゃあさ。この中から、見たいのを適当にえらんで、観たいの観ればよくない？」

（おいおい、それって放棄してんじゃね？）

雅紀はそう思ったものの、何も案がでないので、何もいわなかった。浩介が指した作品は3つだった。多分、女子は3人が別々に分かれて、そこに男子が混ざろうとしているのだろう。作品は、全部最近はやりのものだった。『未来王』『家探し』『ミラクルケイト』。

「女子は何にすんの？」

浩介に振られた3人は少し相談した後、3人ともバラバラのものを選んだ。未来が『家探し』、百合が『未来王』、織が『ミラクルケイト』だった。この順番を聞いた浩介は、雅紀と俊の意見も聞かないで観る映画を決めた。俊が『家探し』、浩介が『未来王』そして、

雅紀が『ミラクルケイト』だった。

「いいか、終了したらこの上のゲーセン集合」

浩介のその言葉で、3組は分かれた。

「松本、少し座ってる。俺がチケット買ってくる」

「いいよ、自分で買う」

「いいから」

雅紀は男の意地を見せて、2人分のチケットを買った。

「ほい」

「ありがと」

『ミラクルケイト』が始まるのは、ほかの2つよりも遅く、少しロビーで待つことになった。本当ならば雅紀がポップコーンとジュースも買おうと思っていたのだが、チケットを買っているときに織が買っていた。

「まさか、3人とも別々のを観ることになんてな」

「だよね、私とじゃあ、嫌だよね。ごめん」

「松本が謝ることじゃねーよ。浩介は元々こうゆうことにしたかったらしーしな」

「へ？」

「いや、なんでもない」

「そう」

2人は、学校では全く話さなかったのを嘘のように話した。

「昨日っさ、何でメール返してくれなかったの？」

雅紀は、会話の種を自分で作った。

「・・・」

織は返事をしない。2人の間に、気まずい雰囲気漂う。

『9時13分上映の『ミラクルケイト』をお待ちのお客様、準備が整いましたので、ご入場ください。尚、チケットはあらかじめ出しておいでくださりますよう、お願い申し上げます』

織が返事をする前に、アナウンスが入った。

「行こうぜっ」

「うん」

2人は、劇場に入っていた。『ミラクルケイト』は、都会にあこがれた少年が、上京し、都会の辛さを見占めたころ、ウイルスがはやり、背がちぢんでしまう。そのウイルスを壊すのは、嫌いだった田舎の、米だけだった。という話した。

（なーんか、タイトル負けしてんな）

雅紀は、どんどん流れていく映像を観た。

映画が終わり、ケータイを確認すると、浩介からメールが入っていた。

『お前ら遅いから、先カラオケ行ってるぞ』

「はい!？」

俺はそう発言してしまった。

「もういいや。栗山、ゆっくりいこ」

「ん? いいけど」

雅紀と織はゆっくりと歩いた。そうしていると、デートしているみたいだ。

「栗山、昨日のメールの返事・・・」

「ああ、あれ・・・あれえ」

あれは嘘。そう言おうとして、雅紀は止めた。素直になるなら、こは嘘についてはダメだと、感じたからだ。

「栗山のいいところって・・・——だよ」

そう雅紀に言ったとき、雅紀の顔は、笑顔でいっぱいになった。

「俺も! 松本のいいところってそこだと思う」

2人は、黙って手をつないだ。

—そのとき、雅紀の中で『松本織』から『憧れのキミ』ではなく、『愛するお前』に変わった。

余談…それから、雅紀は妄想はしなくなった。高校に入ってからかもしれないが、思春期が終わったからかもしれない。貴方は、思春期ですか? 恋愛するだけが、思春期ではないですよ。

3度目の変化。そして、締りのない終わり方……。 (後書き)

はい。ありがとうございました！なあくか終わり方がしっくりしませんでした。が、どうでしたか？この話は、僕の友達の体験をもとに書きました。(その割にはリアルじゃなかったとか言わないでください(笑))できれば、感想くださると嬉しいです。この話はこれで終わりですが、続きも書けたらいいと思います。できれば『ミラクルケイト』も(笑)僕はこれからも頑張りたいと思います。因みに、最後に織がいったことばを、最後の最後まで読んでくれた貴方にだけ教えます。

この話しは、勢いよく書くことができました。

浩介と俊の恋は、次回書きたいと思います。(だって、現実でもまだですから・・・)

それでは、この話を最後まで読んでくださった貴方に、

『ありがとう』

「・・・いいところって『私を好きにさせてくれたことだよ』」

超ベタって自分でも思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1928n/>

妄想少年の思春期恋愛－栗山雅紀篇－

2011年10月7日18時25分発行